リロード

akira

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リロード

【Ｎコード】

Ｎ５５１５Ｙ

【作者名】

ａｋｉｒａ

【あらすじ】

こんにちは。Ａｋｉｒａです。

Reload1　・・・

・・・こんにちは。ａｋｉｒａです。

初めてなので温かい心、目でお願いします・・・。

ではあらすじを・・・・。

あるひとりの中学三年生（普通の受験生）が

繰り返しの生活に嫌気が差していた・・・。

そんな冬前の帰り道・・・・・・

そこで見たもの・・それは世界を潰そうとする組織・・

「キル・アーツ」・・・

それはどんな集団なのか・・

そして大きく「いつも」が変わっていく・・・・

どこにでもあるような物語・・・

「リロード」お楽しみ下さい・・・。

Reload2 ―生活1―

「早く来いってーーー」「うるせぇな・・・待ってろよ。」「早く出てこいって・・・。」

そんな混ざった声がする中、俺は一人鞄を背負って歩いていた。

（くだらねぇ・・・なんでそんなに大人数で帰ろうとするんだ？）

（どうせ一人では何も出来ない屑か・・・。いや、塵か・・・。）

”塵も積もれば山となる”の意味がよくわかる・・・。

するといきなり後ろから声をかけられた。

「わぁぁぁ！！！」

いきなり耳元で大きな声が聞こえた。

「うぁぁぁぁ！！！」

俺は声を上げて驚いてしまった。

（おいおい・・・ふざけんなよ・・いきなりとか反則だろ・・・。）

「何考えてんだ・・・？？」そいつがアホな声を出した。

「・・・・何も・・・・っていうか脅かすのやめろ。水野。」

あぁ・・こいつは水野。水野　優作。

イケメンってほどじゃないけど。かっこいい。

・・・らしい。

本当に勉強ができない奴・・・悪知恵だけは一級品・・・。

いつもおれはこいつと帰っている。

「なぁ、やっぱり女子はせこいよな・・。」

その質問に俺は・・・「あぁ。せこいな・・・。女は。」

女は汚い。色々な意味で・・・・・。

「あぁ・・そうだ・・・・

Reload2 ―生活2―

俺・・学校で今日、用事があるんだ。」

「はぁーーー？？？」　「まさか・・・・女か？？？」

「ちげーよ。っていうか女がいんのは優作の方だろ・・」

優作は作り笑いを見せた。

「まぁいいや・・・じゃ俺先かえってるわ・・。」

校門で俺は優作と別れた・・・。

（・・・本当は用事なんて無い・・・。一人で帰りたかっただけ・・・。）

人間、一人になりたいときもある・・・。

（でもそれだけで友達に先帰れだなんて・・・・・・・）

「俺は最低だな。」

帰り道・・声がポッと出てしまった。

俺はふと周りを見た。誰一人の影もない。

でも俺はこの雰囲気、空気が好きだ。特に風が気持ちいい。

進んでいくとあるものがみえた・・。

あ・・・

そこにいたのは優等生には見えない連中だった。

1、2、3、4、5、6・・・6人か

（そんなにたむろって何がたのしい??社会の底辺が・・・）

俺は連中を睨んだ。っていうか睨んでいた。

（空気を壊すな・・・・。）

すると案の定こうなった・・・・。

「おい！！！　何見てんだコラ！！」

「見て何が悪い。」

俺は冷静な口調で言い返した。

「やんのか、ゴルァ！！！！」

不良の口調に俺は笑ってしまった・・・。

「はは・・やんのかとか・・ハハハッ雑魚キャラの決まり文句だろ・・・。」

その言葉が引き金となり、不良をキレさせた。拳が飛んできた。

Reload2　ー生活3ー

俺はなんとか拳をかわした。「ッつ・・・あぶなっ・・・。」

俺は相手を押して、逃げた。

おい！！逃げんな。・・・そんな声が聞こえてくる。

「こんな人数差で逃げねぇ奴いないっての。」

あ、そうだ・・・忘れてた。

俺の名前は「武藤　一輝」（たけふじ　かずき）

頭はあんまりよくない。　スポーツだって出来るってほどじゃない。

結構取り柄の無い受験生。だって全部中くらいだから。

あ・・もう家に着いたのか。

「ただいま。」

「お帰り。一輝。」母さんが出てきた。

俺は自分の部屋に行った。

・・・ふぅ。疲れたな。

今何時だ??時計を見ると１６時３０分を指していた。

・・・４時半か・・・・。

俺はベッドに飛び込んだ。「あ・・・やば・・・・寝そうだ・・・。」

ね・・そ・・――――・・――――

Reload3 ―夢1―

―――――・・・・

あ・・・今何時だ・・・？俺は寝起きの体を動かし、時計を見た。

・・・え・・・・・？

時計は１６時３０分のまま止まっていた。

（ついにこの時計も壊れたか・・・くそっ）俺は下に行った。

・・・・え？っちょ・・・へ？？

母さんが動いていない。ＴＶも止まったままだった。

「か・・・母さん??」呼んでも返事をしない。

（これ・・・・夢だよな・・・・・。）

（あ・・・・ま・・まさかな・・。）

俺は外に出た。（やっぱり・・・なんなんだよ。）

道にいる人は全員止まっていた。（なんだよ・・・・これ・・・。）

「あ～。やっと見つけた。」声が聞こえた。「き・・君は・・？？」

「あ・・そっか。まだ何も知らないんだっけ。」その子は言った。

その子は俺と同じ位の歳で制服を着ている。（この制服・・・どっかで・・・。）

「じゃあ、また詳しいことは後で教えるから。じゃあね！！」

「え・・・呼んだの・・・？？」俺はいい方が気になったから聞いた。

「うん呼んだ。・・・・・あっ・・もう時間がないからまたね！！」

「っちょ・・・どういう・・・・・・

Reload3 ―夢2―

（・・・・あ・・クソッ・・意識が・・）

急に眠気、だるさが襲ってきた。めまいもする・・。

「じゃあ、また。」俺があそこできいた言葉はこれが最後だった。

―――――――――――・・・

・・・あれっ・・・・・・？目が覚めた。

すぐに体を起こし時計を確認した。・・・１８：３０。

（やっぱり夢か・・。あーあ。全然寝た気がしないぜ・・。）

俺は今の夢を鮮明に覚えていた。夢ってこんなに残るかな・・。

「一輝!!早くお風呂に入りなさい!沸いてるわよ。」

母さんの呼ぶ声が聞こえた。その声で俺は自分の世界から戻った。

（まぁ、なんでもいいか。）そう思い俺は下の階へ向かった。

「一輝、疲れているのはわかるけど中途半端な時間に寝ると夜に寝れなくなるわよ。」

母さんが心配した声で言った。「はーい。・・・あ・・・・・」

一瞬、夢のことを話そうか迷った。が、やめた。

（考えるのはやめよう。さぁ風呂！！！）

俺は深く考えるのはやめた。

［重大なことだったのに・・・・・・。］

Ｒｅｌｏａｄ３　－夢３－

・・・今日は金曜日。俺は金曜日が好きだ。明日は休みという開放感がたまらなく好きだ。部活もとうに引退している。

だから今日はやけにテンションが高い。俺は朝起きて時計を見た。

７：２０か・・・ふぅ。まだ全然時間がある。ゆっくり準備しよう。
俺は下の階へ向かった。

「おはよう、一輝。」母さんの言葉に俺は元気な声で返した。「おはよう！！母さん！！」

母さんは「元気だなぁ」といいながらご飯を作っている。母さんはご飯をつくり、また寝た。

・・・・今日の朝飯はウインナー、卵焼き、白米か。

俺はご飯を食べ終え、早足で自分の部屋へ向かった。

「・・・・7：45か・・・・」俺はほぼ全ての準備を終えていた。

「よし。歯を磨こう。」洗面台へ向かった。

７：５２・・・・・俺はいつものようにＴＶをつけた。

俺はいつも”めざましテレビ”の占いだけを見ている・・。

７：５８・・・・・・・「今日の一位は・・・・さそり座のあなた

！！！！・・」

アナウンサーが言っている・・・。

マジかよ・・・「なんでいつもおひつじ座はワーストに入ってんだよ・・・・。」

おひつじ座は１１位だった。・・・・・８：０２。

よし。そろそろ行くか・・・。「いってきます。」

行ってらっしゃい。と母さんは部屋越しに言ってくれた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

俺は家を出て、いつもの道を歩き出した。

・・・・・・あの・・・・・・あの退屈な「屑のたまり場」へ・・・・・・。

Ｒｅｌｏａｄ４　－変化１－

・・・それにしても昨日の夢は何だったんだ・・・・・・・・・。

俺は何故か考え込んでいた。ふと気づくと既に学校に到着していた。

・・・・・・・・・・・・

時間は・・・・？・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8:20。

（予定どうり。五分前到着。）俺は靴を履き替えて教室へ向かった。

俺は一応いじめられてもないし、嫌われているわけでもない・・・。

だから一応挨拶はする・・・・・気がする・・。

「一輝！！オッス。」名前も言う価値もない奴が俺に声をかけてきた。

「あぁ。おう。」俺はいつもの？？？ように挨拶した。

（あぁ・・・朝から面倒くさい・・・。屑に挨拶されても意味がないんだよ。）

俺は完全にまわりを見下している・・・。訳は・・・・・今は言わないでおこう・・・。

「未来を変えることができても・・・記憶は変わらない・・・。」

おっと・・。ネガディブ発言しちまった。

俺は教室という「空間」へ入った。俺は何故かこのクラスで孤立している。

誰も俺に話しかけてこないし、誰も俺を見ようとしない・・・。

とは言っても無視されるわけでもない・・・・。

「おはよう」と言えば「おはよう」とかえってくる。「じゃあね」と言えば「じゃあね」とかえってくる。まるでオウムと話す感覚だ。

俺は席に着き、鞄の中身を机の中に突っ込みカバンはロッカーに放り込んだ。

そしていつもどうりの一日が始まる・・・・・。

・・・・・・8：25・・・・・・・・・チャイムが鳴った。遅刻の区

切りだ。

このチャイムより遅く教室に入ると「遅刻」だ。

チャイムが鳴っている途中に数人パラパラ入ってくる。

計画性の無い奴らだ。・・先生が配布したいつもの朝学習プリントをやれとくちゃべっている馬鹿共に声を掛ける。

・・・・・・・・・・

（・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・今日も全く同じ一日か・・・・。）

俺はそんな平和なことを考えていた。・・・・”今日も同じ”だと

思っていた・・・・・。

Ｒｅｌｏａｄ４　ー変化２ー

・・・・・キーンコーンーーーカーーーンコーーーン・・・。

（あ・・・）気づいたら二限目が既に終わっていた。二限目と三限目の間には１５分の
休憩時間と給食終了後、２０分の大きな休憩がある。

その時間、俺はみんなとサッカーをやっていた。その中に優作もいる。

俺はじゃんけんで負け、キーパーをやっていた。

今日も何も変わらない・・・・。と思いつつもサッカーを楽しんでいた。

その後も時間がとても早く進んだ・・・・気がした。

……………………

――帰りの会――

先生が明日の連絡をし、話を終える。級長が「起立！！！！」と大きな声。

「さようなら！！！」級長の声が響いた。みんながぞろぞろ後ろのロッカーに集まる。

その中に俺もいた。邪魔だ、どけなど嫌な会話がごちゃごちゃしている。

（早く出よう・・・・こんな空間・・・・・嫌だ。）

俺は教室を出て、靴を履き替え、外に出た。

校門まで行くと優作がいた。「一輝、行こうぜ。」

「あぁ。帰ろう・・・・・。」

2分程沈黙が続いた・・・。優作が口を開いた。

「・・・・なぁ一輝、今度ゲーセン行って鉄拳犯りに行こうぜ。」

「おいおい・・・”やりに”の漢字が違うぞ。」・・・・・そんな感じで話が続いた。

気がつくと帰りの分かれ道まで来ていた。

じゃあな。と別れ、残りの道を歩いた。

Ｒｅｌｏａｄ４　－変化３－

そういえばもう冬前か・・・・暗いな・・・。

（家帰ったら何やろう・・・・）どうせ勉強か・・・・・・。

・・・・・・え？　何か見える。しかし暗いからよく見えない。

黒い・・・・・・人？？？・・・・なんかヤバそうだな。

「・・・・・・・・・・・・ミツケタ・・コロセ・・・コロセ。」

「ワレラ・・・ノ・・キョウイニ・・・・ナル前に・・・・・」

”コロセ”

何か言ってる・・・。「すみません・・・・・どうかしましたか？？」

この俺の行動は愚かな行動だった・・・・。

（え・・・・消え・・・・・。）

その瞬間えぐるような強烈な痛みが襲い、目の前の景色が変わった。

「ッガッ・・・・・ガハッ・・・・・・」

俺は腹を殴られ吹っ飛ばされていた。汚物混じりの血を吐いた。

気絶しそうな痛み・・・・・・・・。やばい・・・・・コイツ・・・・なんなんだよ！！

”ニゲロ”頭がそう指令を出しているが痛み、それと足がすくんで動けない。

黒い人は腕から包丁のようなものを出した。

「コロス・・・コロセ・・・・・キョウイになるまえに・・・・コロセ。」

俺は完璧に死ぬと思った。「・・・・・コロサレル・・・ヤバイ！！！！！！！！」

Ｒｅｌｏａｄ４　－変化４－

黒い人はこうして考えている間にも近寄ってくる。俺は罠にかかった鳥のようにもがいた。

「嫌だ！！！！！死にたくない！！！！」俺は柄にもないことを大声で叫んでいた。

「コロセ・・・キョウイに・・・ナルマエに・・・・・」

”コロセ”

黒い人は俺のすぐ近くまで近づいてきた。

（俺は・・・・死ぬのか・・・？・・・・クソッ・・・・）

死を覚悟した。

・・・・・な・・・・なんだ？？？

頭の中で声が聞こえた。

”リロード・・・・開始。”

（なんだ？？リロード？？）

”リロード率・・５６％”

・・・・・・・・・・

「うっ！！なんだよ・・・・。」体が痺れる。

「コロセ」

黒い人は腕の刀を俺に向け振ってきた。

ヒュン。刀は空を切った。俺は黒い人の攻撃をかわした。

（あれ??・・・体が勝手に・・・・。）

また頭の中から音が聞こえた。

”リロード率１００％”

・・・・・・・・・・・・・

”リロードが完了しました。攻撃態勢に入ります。”

（・・・・・・・・・・・・・・・・・・え・・・・・・？？）

黒い人がいない。なんなんだ・・・・・。

「ぐあぁ！！！！！」腹に激痛が走った。

――――……

（・・・・なんだ・・ここは？）確か俺は・・・・

”黒い人”

「うっ・・・」恐怖で吐き気が襲ってきた。

???「大丈夫か???」

Reload4　―変化5―

「あ・・あなたは・・・？？」俺はその人に聞いた。

「俺は　藤森　陣。まぁお前の仲間ってわけだ。よろしくな。」

仲間？？？俺に仲間なんていない。「仲間？？」と俺は聞いてしまった。

「そう。仲間だ。・・・なんだ・・お前まだ何も知らないのか。・・・あいつ・・なんで教えてないんだよ。」

「あいつってあの・・・女の子ですか??」

「あぁ、そうだ。あいつの名前は夜空　広海。あいつもここらへんのローダーだ。・・あ、ローダーってのはリロードできるやつだ。」

「え・・・??」頭がこんがらかった。

「説明しないとな。・・・まず・・。」

藤森は話しだした。

「まずお前がさっき倒した奴。あれは”ブラック”って名前だ。」

「え・・・倒した・・・？？？？俺が・・？？」

「お前・・・無意識の内に”リロード”していたのか。・・まぁいい。んでお前はあんな奴らを倒す奴のひとりに選ばれたってわけだ。うん。・・・・いわば正義の味方だな。」

「俺が・・・戦う・・・・？あんな奴らと？？？」

「あぁそうだ。それで・・・お前の武器・・・明日お前がいつも身に付けてるモンもってこい。住所は・・・・・」

「分かりました・・さようなら。」俺は家まで藤森に送ってもらった。

・・・・・・19：00・・・・・

「ただいま・・・・。」

「お帰り・・・遅かったわね。」母さんは心配していた。

（なんか・・・とっても強引だったな・・・。）

・・・・・・俺はいつも身につけているものを考えた。

「・・・うーん。シャーペンか・・・なんかな・・。ノートもちょっとな・・・。」

（どうしよう・・・・そう言われるとないんだよな・・・。）

「ピピピッ」携帯が鳴った。「優作からメールか・・・あ・・・・・・」

ケータイか・・・

（携帯でいいじゃんか。うん。携帯にしよう・・・。）

「うん。それでいいや。風呂入ろ。」

俺は下着を用意し、風呂に入った。

Reload5 ―戦闘1―

「おぅ、来たか。」

「こんにちは。」俺は藤森のところに行っていた。

「んで、何にしたんだ？？？？」

「これです。」俺は携帯を見せた。

「携帯か。おっし。貸せ。」藤森はそう言うと少し強引に俺の手から取った。

藤森はパソコンをいじり始めた。「よし。行くぞ。」

”リロード・・・コピーモード・・・・・・・・・・コピーを開始します。”

キュイーーーーーーーーーーーーーーーーーン

機械音が鳴ると携帯が光り始めた。

「ローダー情報・・・・・・・・・確認。」
リロード情報・・・・・・・・・確認。
ユーザー情報・・・・・・・・・確認。

・・・・。・・・・・。

その他・・・・・・・・・確認。

※一部認識出来ないプログラムがありました。

今すぐ起動しますか？

はい。（Y）　いいえ。（N）

こんな文字が携帯に写った。「なんだ・・・これ・・・・・。」俺は思わず口に出した。

「・・・・・よし。・・・・ロード完了だ。ほらよ。」

「これで・・・いいんですか??? 」見たところ何も変わってない。

「あぁ、おｋだ。そのケータイはどうなろうが壊れない。そう設定した。・・・リロードしたいときは”ｒｅｌｏａｄ”って言うだけだ。いつあいつらが出てくるか分からないからな。注意しろよ。」

「・・・・分かりました。」

「あぁそうだ。”ｒｅｌｏａｄ”って言うとその携帯が”武器”になる。何かはその時にわかる。」

「・・・・はい。分かりました。」

俺は藤森と別れ人通りの全くない夜の河川敷を自転車で走っていた。

（何が・・・・これから何が起こるんだ。）

正直俺には何が自分の周りで起こっているのかわからない。

・・・・・・・・・

その時、携帯が鳴った。「ピピピッ・・・・・アーツを発見しました。半径１００ｍ内。」

「え？？？アーツ？？・・・・・敵なのか・・・・・？」

.
.
.
.
.
.
.
.
.
.
.
.

また携帯が鳴った。「半径５０ｍ内。」

「半径２５ｍ内。」

「20m内。」

.
.
.
!

俺は自転車を止めた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・

「reload」

Reload5 ―戦闘2―

”・・・リロード・・開始します。”携帯が光った。

キュイーーーーーーーーーン。　　あの時の機械音。

それと同時に”リロード完了。戦闘態勢に入ります。”

「ブイーン。」携帯の先から黄色い光?が出ていた。

俺がリロードしたのは目の前にもう敵が居たからだ。あの時の・・・
”ブラック”って名前だ。

「グググ・・・ギギギ・・・」意味不明な音を出してブラックは
近づいてくる。

「この光・・・・・もしかして・・・。」俺は携帯を握り直した。

「喰らえ！！！！」俺は携帯の黄色い光を敵に切るように振った。

（多分こういう武器だろ！！！）一瞬、時が止まったような気がした。

「グ・・ギギ・・・ガ・・・グアァァ・・・。」ブラックはまっぷたつに切れた。

「やっぱり・・・・・これ・・・・。」やっぱり黄色い光はやっぱり切る光、”セイバー”だった。

（あれ？・・・なんで俺・・・名前知ってんだ？）すると携帯が鳴った。

「おめでとうございます。ランクが”E”から、”D”に昇格しました。”モード”が選べるようになりました。」

「ランク??・・・・レベルみたいなもんか。」敵は消滅していた。

「なんだ。敵・・・あんまり強くないじゃん。これなら余裕だな。」

俺は自転車に乗り家に向かった。

Reload5 ―戦闘3―

・・・・・ん・・あ・・・そうだ・・・。今日は月曜日。学校か。くそ・・・。

俺は重い体を起こした。「今何時だ・・・??」・・・・・・・・5:30

「まだ全然時間あんじゃん。なんで起きちまったんだ。」早起きなんて何年ぶりだ??

そんなことを考えていると携帯が鳴った。「ピピピッ。」

「え??・・・・・まさか・・・。」その音は俺の予想した通りのものだった。

「アーツを発見しました。半径２５０ｍ内。」携帯がほざいている。

ふざけんなよ。こんな朝早くから・・・・あぁ！！もう！！

俺は渋々制服に着替えた。

母さんにバレないようにそっと鞄を持って家を出た。

「今敵は何処に居るんだ???そんくらいわかんねぇのか????」

俺は携帯を見た。

しかし携帯はいつもの画面だ。（あっ、リロードって言えば・・・）

「チガウ・・・”menue”ッテイッテ・・・・。」

頭の中で聞こえた。（なんだ今の・・・え・・・メニュー？？？）

「ｍｅｎｕｅ」俺はいってみた。

すると携帯の画面が真っ暗になった。その後白い文字で・・・

モードファイル

リロード情報

ランク情報

マップ情報

閉じる（9）

と出た。

（・・・マップ情報か・・？？？）

俺は携帯を操作してマップ情報を開いてみた。

.
.
.
.
.
.
.
.
.
.
.
.
.
.
.
.
.
.
.
.
.
.
.

ピコン・・・・。「なるほどね・・・・・。」

携帯の画面には敵の位置が表示されていた。（すぐそこじゃないか・・・・。）

俺は敵の方へ走った。

Reload5 ―戦闘４―

（・・・あれか・・・）俺は敵を見つけた・・・。

「またあいつか・・・。」昨日と同じ敵・・・ブラックだった。

（俺を探してるんだな・・。よし。）「ｒｅｌｏａｄ」俺は小声で言った。

「リロード完了・・・。戦闘態勢に入ります。」

キュイーーーン・・・・あの機械音。

「ブィーン。」

「・・・・・・よし・・・。速攻で終わらせる・・・・。」

俺は後ろから狙った。「ブン。」あれ・・・・・・。

「ドン。」鈍い音が鳴った。（え・・・・？？）

その音は敵が俺に殴った音だった。痛みが後から襲った「ッグ・・・・。いってぇ・・・。」

俺はすぐに反撃した。思い切り携帯を振った。「ブン。」また空を切った。

（な・・・なんで・・・・・。）

「スー」その音と同時に右腕に激しい痛み。

「熱っ・・・うあぁぁぁ！！！！！」右腕を見ると肘から下がない。

相手を見ると腕から刀を出している。

「ッグアア・・・・・・！！！」痛い！！痛い。

（ヤバイ・・・・腕が・・・・）俺は左利きだから最悪の状況は回避できた。

（どうする・・・・クソ。）

敵は近づいてくる・・・「ググッ・・・・・ッガ・・・ゴア・・・。
」

（一か八か・・・・よし。）俺は体勢を低くして相手をむかいうった。

「おらぁぁぁぁ！！！！」時の流れが遅くなる・・・・・・

「ジュン・・・・。」生きている・・・痛みと生きている・・・・。

敵は両足を無くし、もがいていた・・・「ガ・・ゴゴ・・・・ギギ・・・グァ・・・・。」

「悪いな・・・・消えろ。」俺は敵の頭に刺した。敵は消滅した。

.
.
.
.
.
.
.
.
.
.
.

・・・すると携帯が鳴った。　「ピピピッ。」

「ご苦労様でした。尚、この時間に受けた傷は修復され全て、元の状態に戻されます。」

「フゥ・・・そうか・・・。よかった。」右腕は修復されていた。

.
.
.
.

俺は近くの公園に行った。「えーと。時間・・・・。」・・・・・・・・・・・・7：57

「おぉ、ギリギリだ・・・・。」

俺はそうつぶやき学校へ行った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5515y/

リロード

2011年11月29日22時54分発行